

2010年度卒業研究

日常会話におけるラポールの形成

—男性のコミュニケーションを例に—

藤女子大学文学部

文化総合学科 0715083 番

氏名 吉田 早希

担当教員 野手 修

日常会話におけるラポールの形成

－男性のコミュニケーションを例に－

吉田早希

はじめに

人は他者との関わりなしには生きてゆくことはできない。時には初対面の人物と会い、また時には気の置けない仲間と語り合うこともあるだろう。そんなときに重要になってくるのは会話である。会話は相手のことを理解し情報を共有するために、多くの役割を果たしてくれる。しかし異性との会話の際、男女の話し方の違いを実感する機会がたびたびあるのではないだろうか。例えばそれは話題であったり、言い回しであったり、反応であったりする。

会話分析などから男女の会話の違いなどを研究している、アメリカのデボラ・タネンは自身の著作で、会話において男性は女性よりも他者に対して独立性や攻撃性を持っていると述べている。著書『わかりあえる理由わかりあえない理由』において筆者は男性と女性の話し方について、男性は互いに一段上か一段下かという〈地位〉を重んじる階層的な序列の中に身を置いているが(2003:33)女性は〈和合〉と〈親和〉を重んじて平等であることをよしとするため男女の会話は、まさに「異文化コミュニケーション」である(2003:56)としている。もちろんこういった男女の違いは万人に適応されるわけではなく、あくまで傾向である。また、別の著作『Talking from 9 to 5: women and men at work』では、男性と女性がそれぞれ持つ会話の形式についてこう述べている。「Conversational rituals common among men often involve using opposition such as banter, joking, teasing, and playful put-downs, and expending effort to avoid the one-down position in the interaction. Conversational rituals common among women are often ways of maintaining an appearance of equality, taking into account the effort of the exchange on the other person, and expending effort to downplay the speaker's authority (筆者訳: 会話形式は普通男性の間で反対を表す時に必要とする。例えば、冷やかす・冗談・からかい・ふざけたこき下ろしといった言葉のやり取りで自らの立場を下げることを避けるために努力する。女性の場合、会話形式は普通平等である印象を保つために使われる。他者と入れ替わった効果を考慮に入れ、話し手の権威を控えめにする。)」(2001:23)それは男性が形式的な喧嘩をすることについて述べられていることからわかる。彼らは女性には喧

嘩にしか見えないような討論を繰り広げ、相手の反論から自らの論の弱点や矛盾を見つけて出してもらえると、うれしくすら感じるというのだ(2001:57-61)。男性は女性と異なり、対立的な行為から親密性を見出すと言えるのではないか。

しかし、男性であっても他者に対し親和的な言動をことは当然あるし、仲間意識を形成することもある。そういった行動に同性ならばそれに気づくことが出来ても、それが女性にはわかりにくいいため男女間では誤解が生じることもあるのだ。つまり、男性は男性特有の親密性を表す会話のスタイルがあるのではないだろうか。

男女に共通して言えることだが会話の際、同じ空間にいる他者と共有している何かが存在すると、その関係は急速に親しくなる。それを *rapport* (ラポール) という。ジーニアス英和辞典によれば、*rapport* とは「(…との)関係, 一致, 調和, (人の)和, 思いやり」とされている。このラポールが形成されるきっかけは何であるのか。本研究ではラポールが形成されるきっかけを明らかにし、男女の特に男性のコミュニケーションについて、心理学や脳科学ではなく文化的側面に注目し会話分析を中心に考察していく。

1章では男性の親密性がどうして見逃されてしまうのかについて問題提起をおこない、2章では男性のラポール形成に関わっている要素を4つ挙げ具体化していく。3章では男性の親密性を分析するために用いる会話分析の有用性について、エスノメソドロジーや日常会話の定義などに触れながら解説していく。4章では1981年にアカデミー賞を3部門で受賞した映画『On Golden Pond』の中の会話から男性の親密性について検証していく。

1章 見逃される男性の親密性

男女の話し方の差異について書かれたタネンの著作『You just don't understand』(1991)においては男性と女性について、男性は互いに一段上か下かという、〈地位〉を重んじる階層的な序列の中に身を置き〈独立〉を重要視しながら行動し、女性は〈和合〉と〈親和〉の言語を話したり聞いたりしていると述べている。お互い異なった立場から物事を捉えて話すので、男と女の会話は、まさに「異文化コミュニケーション」となるのだ。また、別の著書『Talking from 9 to 5: women and men at work』(2001)では、男女が上記の立場で会話をするために、男性と女性がいかに異なっているかについてビジネスの場を中心に豊富な例を用いて語られている。例えば相手を褒めることについて、決断する時の行動について、自己評価について、アドバイスする時の言い方などだ。男女は全てにおいて正

反対だと勘違いしてしまいそうになるほどである。

タネンが心理学者のドーバルの実験から得た会話分析によれば、男性は幼少のころから競争の中に身を置き、自らの地位を守るために努力している。その中には、自らの知識を披露したり、冗談を言ってみたりして、話題の主役になろうとする行為も含まれている。タネンはそういった話し方のスタイルを「パブリック・スピーキング」と名付けている。そのため、その話し方に慣れた男性は、私的な場であっても「パブリック・スピーキング」で話すことが多々あるという。

タネンによる男女によるコミュニケーションの違いの特徴的傾向を図にすると以下の図のようになる。

競争的 男の会話スタイル	和合的 女の会話スタイル
「地位」を築こうとする	「親和」を築こうとする
上下や優劣を競う	対等を重んじる
自らの独自性を強調する	相手や周囲との同質性を強調する
対立的・攻撃的な姿勢をとる	協調的・平和的な姿勢をとる
情報を重視する	感情を重視する
直接的な表現を使う	間接的な表現を使う

(田丸・金子 2001:24)

この表からわかるように、男女は正反対の行動をとることが特徴づけられている。タネンによる研究は豊富なデータを有しており、例としてあげられるのも誰もが経験したことのある状況が多く説得力にあふれていて、共感し納得する内容だ。しかしタネンの研究にも問題点がある。村田が指摘するようにタネンの研究データは、調査対象が北アメリカの中産階級の白人と限定されており、異なる言語や文化において普遍性を持つかどうかについては実証研究に乏しい(2007:35)。また、タネンの研究に関する重要な問題は、男女を二項対立的に捉えているという点にある。

男女の話し方や態度について、二項対立的に考える研究者は多い。Gray (1992) もその一人だ。彼の著作『Men are from Mars Women are from Venus』はそのタイトルの通り1章は男性と女性をギリシア・ローマ神話における戦の神と美の女神に例えたものから始まっている。内容はタネンの論に近いが、男女間、特に夫婦や恋人間で起こりうるトラブルについての解決策をわかりやすく例をあげて述べられている。

どちらの著作も二項対立的に男女を捉えており、男性の示す親密性についてはあまり触れられていないのが現状である。男女を二項対立的に定義づけることによる問題は、男女は性別のみならず文化も感じ方も全く別のものというイメージが先行し、男性の示す親密性や女性の主張する独立性が見逃される可能性があるというところにある。れいのるず秋葉はこう述べている。「現実には、男にも女にも様々な人間がいるのであって、女という概念、男という概念は、連続したセクシュアリティの両極であるにすぎない。二分思考では、両極の女らしい女、男らしい男だけが人間らしいとされ、その中間の人間は逸脱扱いされる」(2004:14)

タネンや Gray に限らず、男性と女性の性差による話し方の違いを二項対立的に指摘する研究は少なくない。日本でも社会に女性が進出してゆくにつれ、男女の話し方の違いやラポール形成における過程の違いが浮き彫りとなり、研究も進んでいったといえる。1989年施行の男女雇用機会均等法や 1999年制定の男女共同参画社会基本法ののち、女性が社会に進出し独立性を獲得してゆく中で、性差による話し方の違いに注目されることになっていった。それは 1994年と 1990年にアメリカでそれぞれ発刊されたタネンの著作『Talking from 9 to 5 : women and men at work』は 2001年に、『You just don't understand』は 1992年に、どちらも法制定後の日本で和訳が出版されたことからわかる。

しかし、そもそも言語とジェンダーについての研究は男女差別を指摘するものから始まったものなのだ。1970年代、英語表現の単語や三人称は女性蔑視・無視の姿勢からきけると指摘されるようになり、当時特に英語圏で言語的性差別を含む性差別をなくそうとするフェミニズム運動と密接に関係があった(中村:2001)。中村のように二項対立的なジェンダー観にとらわれたことで、使用言語・年齢・社会的地位・人種・居住地域等の様々な複雑に絡み合う要因が無視されてしまうことを問題視し指摘する研究者もいるが、男女を二項対立的に捉える方法はそのはっきりとした明確さと、共感の得やすさや受け入れやすさから社会全体に広まっていた。

二項対立的なコミュニケーションの定義が浸透していく中で、男性は自分たちの親密性や自らのラポール形成について積極的に述べてこなかったことも、男性の親密性が見逃される一因といえる。伊藤(1993)は、男性は社会的に求められる男らしさや規範的男性性

からの抑圧を受けていると主張している。男性は社会的に定められた男性性に、女性に求められる女性性以上にこだわり、縛られているというのだ。そのため“男は一人でも強く生きる”といったような、ステレオタイプの考えにとらわれ自らの親密性について語ることはなかったのだろう。そういった一連の社会の流れや風潮の中で、男性の親密性については見逃されてゆくこととなっていた。

多賀（2001）の男性のジェンダー形成における葛藤や考え方についてのインタビュー調査の中には、スポーツが出来ないことがコンプレックスだった男性が、メンズリブの集会にて自らのコンプレックスについて発表すると、思いもかけず共感を得たことで安心感を得た、というものがある。このインタビューから、無意識的に人からけなされたり下に見られたりことを嫌う男性も、本心では自分と同じ考えを持つ仲間が欲しい、共感を得たいと考えていることが読み取れる。また、小説や映画で男性が仲間や友人から認められたいと願う場面を見たことがある人も多いただろう。タネンのいう女性的な〈親和〉を求める意識である。タネンは男女を二項対立的に捉えてはいるが、男性も女性も〈地位〉と〈和合〉のみにとらわれているわけではないことを、もちろん認めている。「女は何とかして〈和合〉を築こうとし、それと同時に、みな同じであることを求められる関係の中で、どうにか「個性」を維持しようと努力している。一方、男は何とかして〈地位〉を築こうとし、それと同時に、対立的な関係の中で、どうにか心がかよう関わりあいを維持しようと奮闘しているのだ。」（田丸 2003:280）男性の親密性や、男性特有のラポールの形成は今まであまり顧みられてこなかったが、確実に存在するものである。

人間誰しも、他者との関係に2つの欲求を持っている。「独立性維持欲求」と「強制欲求」である。この二つは相反する性質を持っているのだが、それを上手く表したたとえ話がヤマアラシのジレンマである。ヤマアラシのジレンマとは仲間と密接し暖をとりたいヤマアラシが、近づきすぎるとお互いを傷つけることに気づき悩むというものだ。倫理用語集によれば、このたとえ話は哲学者のショーペンハウアーの話をフロイトが引用したものであると述べられている。求められる社会的規範に固執する男性は特にヤマアラシのジレンマを強く感じている可能性がある。しかし前にも述べたように、男性であっても親密性を示し状況に応じてラポールを形成しているのだ。

中山（2003）は Duck（1991）の定義を引用し、親しい関係によって満たされる基本的な人間の必要性について5つ挙げている。その5つとは①一体感/所属感②感情の安定③コ

コミュニケーション④困った時の援助⑤自尊心の維持である。人間であれば男女関係なくこれらに関して満足したいと思っていることは言うまでもなく、そこに男女の差はない。また、男女共通して会話の中からラポール形成が行われる際に重要となってくる行動というのは存在する。齋藤（2004:78-98）はコミュニケーションを円滑にするための、身体に関する基本原則を4つ挙げている。

1) 目を見ること。目を見るということは相手の存在を認めているということであり、そうすることで言葉が伝わりやすくなる。しかし、あまり人の目をじっと見るのは好ましく思われにくいこともある上に、じっと見つめることは威嚇と捉えられる危険性も含んでいるので、注意が必要である。

2) ほほ笑むこと。軽くほほ笑むことは相手を受け入れているサインである。普通人は話すとき、自分が受け入れられているかを気にしているので、話の途中でふっと漏れるほほ笑みは場を和ませる効果がある。

3) 頷くこと。頷きは話を聞いているというサインであると同時に、感情的に話し手を受け入れているというメッセージを持っている。頷きは相手の意見に同意・同調する傾向があるが、それは絶対的なものではない。そのため、意見に賛同しなくても頷いてから反対の意見を述べることも可能である。

4) 相槌を打つこと。相槌は話の流れを良くする潤滑油のようなものであり、相槌により相手は話しやすくなる。相槌は相手の話に同意する意思を示す言葉ではあるが、頷きとセットになることが普通であり、こちらも相手の話に同意するかについて絶対的なものではない。

このように、一般的なラポール形成が可能なコミュニケーションは、性別にとらわれることはない。ただ表現の仕方や置かれた状況が違うため、コミュニケーションスタイルや親密性の表現の仕方が異なるだけなのだ。そこで、次の章ではそれぞれについて男性がどのように表現し、どういった状況におかれているかを調べてみたいと思う。

2章 4つの親密性

この章では、男性の親密性について言われていることを、日常生活で身近な会話・服装・身体・儀礼に分けてあげてみる。この4つを取り上げたのは、日常生活においてほぼ無意識的に、しかし確実に親密性に影響していると思われるからだ。

1. 話し方による親密性

タネンが、男性と女性では会話のスタイルが大きく異なるために誤解が生じることが多いと主張しているのは「はじめに」でも述べたが、特に女性にとって理解しにくいのは男性が示す冗談と衝突の会話スタイルだ。

地位が重要な男性にとって会話は自己顕示の場であるが、冗談を言うときは一段上に立てるチャンスである。そこで、男性同士が楽しむユーモアは相手をけなす儀礼に基づくことが多い。たとえば、「けなす」「からかう」「ひやかす」といった相手を一段階下げる言い方をするのだ。同調に基づく会話スタイルを持つ女性は、そういった相手を貶めるような男性の冗談を通してのラポール形成を理解できないものとして見る。また同様に、男性が話し相手に喧嘩腰に食ってかかったその後に、平然と仲良く話しているのも女性が理解できない行動のひとつである。しかし男性にとって衝突は地位確立と人間関係構築に欠かせない儀礼であり、相手を認めているからこそ食ってかかることができるのだ。喧嘩が出来るのは仲がいい証拠でもあり、喧嘩が仲間に入るきっかけとなることさえある。

他にも、愚痴や相談に関し男性はたいしたことではないと早めに片づけることがある。それは、相談している者が自らの弱みをさらけ出すことで立場を一段下に置くのを避け相手と自分との対等な立場を守ろうとする行為である。

男性にとって仲良く話せる相手というのはそういった会話スタイルを共有できる相手であり、それを理解し上手く反応出来れば親密性は一気に上がるというわけだ。

会話による親密性については、後の3章と4章で詳しく検証していく。

2. スーツによる一体感

自らの会話スタイルを共有できる相手だと認識するのに服装が役割を果たす場合がある。服装の趣味が人によって様々あるように、服装はその人の雰囲気や人となりそれをそれとなく表わすファクターとなる。特に現代の男性は職場や改まった場で、スーツを着ることが多い。特定の服装をすることで、そこに集団意識が生まれ、スーツによって統一された服装は、自分たちが同一の会話スタイルを持つ集団であると言外のレベルで伝えるものとなる。ホランダー（1997）によれば、男性は中世から近世にかけて女性以上に派手な装いをしてきたが、18世紀半ばイギリスのジェントリ階級の男たちがスーツの先駆けを身につけるようになってから、男性のスーツが一般化してきたと述べている。イギリス人が本国で普及したスーツを着て植民地へ進出していったことで、それは徐々に世界に広がり今では一部

文化を除き世界中の男性は公の場でスーツを着ている。

なぜそこまでスーツが社会的に認められるようになったかについて、東（2003）はブランメル（1778～1840）の影響をあげている。ブランメルは徹底したダンディズムで19世紀初頭のイギリスモード界を席卷した人物である。彼は当時の一般的な紳士と同じ服装をしながらも、清潔さ・無駄の抑制・完璧なネクタイの結び方を徹底していた。また、高い精神性がイギリス紳士たちに影響を与え、後々までスーツとは男性の紳士の側面を強調するもののイメージを作り上げたとしている。

つまりスーツは、一体感とともに対外的に安心感と信頼を与える材料となりうるのだ。それは男性のコミュニケーションでも同様で、相手に対して安心感を与え、なおかつ周囲の男性と一体となることで対等な立場で会話をすることが可能になると考えられる。

3. 身体的接触

アメリカやヨーロッパ文化ではあいさつの際に握手をすることがあり、政治の場などでは友好や和解などを示す儀礼として用いられている。Powell（2008）は政治家の握手の時、どちらの手が上に来ているかを見ることで力関係を見ることが出来るとしている。体の一部である手の接触からお互いの関係や意思を見ることが出来るのだ。小馬（1996）は、手に関して、手は個人の内面を反映し時として顔以上に人間性を映し出すと述べている。

ファーバーの5歳になる息子のための誕生日パーティーにおける挨拶行動におけるケンドン・ファーバーの実験によれば男性と女性のあいさつの方法は以下の通りになった。実験場所はニューヨーク郊外のファーバーの自宅、屋外のホームパーティーである。

近接した あいさつの類型	男性－男性	男性－女性	女性－女性
非接触	1	9	11
握手	10	7	2
抱擁	3	10	3

(1968:179)

この表から男性同士では握手、異性間では抱擁、女性同士では非接触のあいさつが見られるのがわかる。また、男性同士の握手の場合握っている右手とは別の左手を相手の肩に置くという挨拶も時折見受けられる。では、なぜ男性はあいさつの際握手をすることが多いのか。

川名（2008）が日本の首都圏大学で行った身体接触と自己開示に関するアンケート調査によると、男性は知らない相手や親しさが確定していない相手に対しての身体接触をあまり嫌に思わず、親密さに関係なく対人戦略的に親密接触をすることをいとわないという結果が出た。ただし、あいさつなどのきっかけがあった時以外に同性の友人から手を触れられたりすると、女性が同性から同様のことをされた時よりも嫌悪感が強いという結果も出ている。

要するに、あいさつというきっかけがあれば男性は冒険的に短期的にでも、相手に対して身体接触や自己開示をして親密さを確立しようとする傾向が強いということだ。この傾向が上記の実験の結果に反映されていると言える。

4. 儀礼的側面

日本のように人間関係を重視する社会では、その人間関係をより円滑にするために、またそれぞれの役割を再認識するために、意図的に作られた序列を壊し再構築するという儀礼が見受けられる。ターナー（1996:237）はそれを身分逆転の儀礼と表現している。それは平素社会構造において低い身分にある者たちからの要請により、彼らより上の身分の人たちが儀礼的な高格を受け入れるものである。その際、一般的に乱暴な言葉遣いがなされることが多い。内藤（2004）は日本におけるその行為をヘネップ（1995）の論に当てはめて、企業での労働後の飲み会をあげて説明している。ヘネップの論とは通過儀礼は分離・周辺・再統合に当てはめることが出来るというものである。以下は内藤による通過儀礼と飲み会の共通点である。

〈分離〉

職場という社会構造から離れ、飲み会の場に移る。

〈周辺〉

飲み会の場において上司と部下の関係が曖昧になり、時間の経過とともにそれが増す。また、上司が職場で行使できるはずの権力は行使できない。

〈再統合〉

飲み会終了後、上司は職場という組織の中での権利と義務を再確認する。部下は上司に上司としての行動を期待する。

さらにヘネップ（1995:21-24）は共に食事をする共餐の儀礼は、正に統合の儀礼であり、ラポール形成に繋がると述べている。

現在職場での女性の割合が増えてきたが、男性の割合が高い企業も多く存在する。そして普通飲み会というのは終業後に行われるものであるため、時間は夕方から夜間になる。すると働く女性は夜間帰宅する際の危険性や、家庭のために敬遠しがちである。また、飲み会は男性の上司と男性の部下数人などで行われることが多く、身分逆転の儀礼は男性が行うことが多くなっていく。

以上で述べた例は男性のラポールの形成についての一部である。しかし、実は男性同士の対人関係に関する組織的な研究と比較は、アメリカに限らず他でもほとんどなされていないのが現状だ。タネンの研究が北米中産階級の白人のみに限られているように、データをとるためには、自然発話を多量に記録し様々な手法を用いて分析するために多大な時間と手間がかかるのだ。また、文字化の作業が伴うため時間と手間もかかる（中村:2001）。

異なった文化を持つ人々は外見上の生活の差異のみならず、内面の心理的基盤も異なっており男性の行動について一般的なパターンは存在しない。たとえアメリカ社会とヨーロッパ諸国のように社会組織の中心的構成要素が類似していても行動面に共通点が多くても、価値観や習慣、規範の差異から相違点が見受けられることがある。ルービン（1992）はそうした違いがその社会で何を意味するのか、ある国民や集団の人々が自らの行動をどのように位置づけるかを知らずに行動上の差異を比較しても、結論は現実をほとんど反映しないとし、男性の人間関係や親密性、感情面での許容範囲についての国際比較の難しさについて指摘している。

上述における男性の示す親密性は、基本的にアメリカやイギリスといった西洋社会の学者が主張しているものであり、彼らが用いるデータもアメリカやヨーロッパといった西欧のものだ。そこで、アメリカの映画を会話分析して、実際の社会でどのように男性の親密性が現れているのかを検証してみようと思う。

3章 会話分析の有用性

この章では、会話分析を用いて日常会話におけるラポールの形成について述べていく。なぜ男性の親密性を検証するために会話分析を行うかという点、会話分析はエスノメソドロジー的な解釈を裏付けるのによく用いられるからである。エスノメソドロジーとは「ガーフィンケルが提唱した立場で、人々の行為や発話は状況依存・文脈依存的であり、日常的な相互行為の中で絶えず意味を生成している、という考えである。人々がどのようにし

て日常生活世界の自明性（共通に知られた性格）を獲得するようになるかを確定しようとする。」（ブリタニカ該当記述要約）もので、社会的もしくは文化的に、つまり状況依存的に会得した男性の会話の中で示す親密性について検証することが出来るのだ。

ガーフィンケルが「エスノメソドロジー」について語る訳は、実践的活動やさまざまな常識的知識や実践的な組織だった推論について日常的に研究を進めている人々がかなりいるからだ。それこそがエスノメソドロジーの関心とするところであり、エスノメソドロジーとは社会のメンバーが持つ、日常的な出来事やメンバー自身の組織的な企図をめぐる知識の体系的な研究である（1993:17）。前田は人と言葉を交わすという実践の特徴は、その中でさまざまな行為や活動がなされるという点で、いわばそれ自体がさまざまな行為や活動をおこなう際の枠組みになっていると定義している。会話分析は「人と言葉を交わすことそのものへの注目」であるのだ（2007:124）。山田（1995）によれば、「会話」分析と言っても研究対象は「会話」にあるのではなく社会的相互行為にあり、会話分析の影響は言語学だけでなく、文化人類学、社会心理学、認知科学などの様々な分野に浸透している。

前田（2007）は会話の中には秩序が存在していると述べている。秩序があるということは、それぞれの状況において場面が組織されていて互いの振る舞いが安定し協調しているということであり、それぞれの状況や場面に可視性があるということだ。エスノメソドロジー研究はそれぞれの場面に可視性を与える（人や物、言葉や道具といった）ことができ、秩序を生み出す一要素となりうるのだ。

分析に用いる日常会話というのは、一見でたために各個人が好き勝手に話しているように見えるが、実は決まった法則がある。山田（1999）は、日常会話を以下のように定義している。

- ・ 授業や会議などではなく、会話参加者にほぼ同等の発言権が与えられる状況である
- ・ 一度に一人が話す
- ・ 話し手の交代が何度も起こる

また山田はこういった会話を分析することで、会話がなされる実際の文脈の特徴を考察しながら、同時にその文脈を超えて一般化することが可能であると述べている。会話分析の結果から、具体的な会話がなされた状況を細部まで詳細に説明できるようになるのだ。

では山田が述べるように、会話分析から得られる情報がこういった風に分析され、それが説明できるようになるか、例を挙げてみる。以下の会話は水島（2006）が20代半ばの

男性 A・B・C に行った調査の一部である。発言権・一度に話す人数・話し手の交代という点において、山田の定義する日常会話に当てはまる調査内容である。三人は高校の同級生で、かつてサッカー部のチームメイトであった。大学の庭で昼食を食べながら話している状況で、A と B が会話する中、C だけは黙々とフライドチキンを食べ続けている。会話は B が撮影しているカメラに向かって、いきなり自らの携帯電話の番号を言う場面から始まる。

〈会話例〉

B : 090 - **** - ***

A : 何が？

B : 俺の携帯番号

A : ははははは (笑)、ばかじゃねえのお前。

B : お前は食ってばかりか、こら。

C : …女の子いないと喋る気しない (笑)

A : あははは (笑)、ひっでえなー。

(水島:2006)

これらの会話から分かるのは、以下のことである。

・ B の 2 回目の会話は一見すると C に対して攻撃的で批判的である。しかし、C は返答に笑いを含ませている。このことから、B の批判は見せかけであり C も本気では受け止めていないとわかる。さらにそこに A も笑いで反応することで、三人の中で B の発話は関係を円滑にするからかいとして受け入れられたと解釈できる。

・ B はいきなり携帯電話の番号をカメラに向かって言うという不真面目な態度から、意図的に A の批判を喚起している。A はそれを受け、笑いで答えることで場を和やかにしている。C の 1 回目の発言も同様の効果を持っている。

会話を分析することで、三人が発話にどのような意味を持たせているのかが理解できる。また、会話の傾向から話している人物がどのような性質を持っているのかが推測できる。例えば、上記の会話で B は積極的に場に笑いを起こすきっかけを提供している。短い会話なので断定はできないが、もしかすると B は三人の中ではムードメーカー的な存在ではないか、といったような推測が可能だ。

このように会話分析は、具体的な会話がなされた状況を細部まで詳細に説明できる手段

なのである。

4章 会話分析による検証

今回、会話分析に用いるのはマーク・ライデル監督『On Golden Pond』(1981)である。この作品は1981年度アカデミー賞において10部門でノミネート、3部門で受賞している。また、同年のゴールデン・グローブでも3部門で受賞を果たしている非常に評価の高い作品である。主演はヘンリー・フォンダとキャサリン・ヘプバーンで、二人は夫婦役を演じ、その娘役はヘンリーの実の娘であるジェーン・フォンダが演じている。

ーあらすじー

初夏を迎えたアメリカ。ニューイングランド地方では「ゴールデン・ポンド」と呼ばれる湖の畔、80歳を迎える元大学教授のノーマンと妻のエセルが夏を過ぎしにやって来る。心臓が悪く物忘れも激しいノーマンだが、おおらかな妻の深い愛情で支えられていた。ある日、ノーマンの誕生日を祝うため一人娘のチェルシーがやって来る。離婚経験のあるチェルシーは、歯科医を開業する婚約者のビルとその13歳になる連れ子のビリーを同伴していた。屁理屈を並べる偏屈な一面を曝け出すノーマンに嫌悪感を露にするチェルシーは、親子の確執を抱えたままに別離を迎えた当時と何ら変化のないものだった。やがて、水いらずのヨーロッパ旅行へ出掛けると云うチェルシーとビルは、生意気盛りのビリーの面倒をノーマンとエセルに委ねる事になる。

ノーマンは典型的なアメリカ東部の人間であり、愛想が悪い上に冗談もきつく頑固で誤解を招きやすい老人である。その点でいえば、1章で挙げたタネンの主張する男性の話し方の特徴を強く持っていると言える。一方、妻のエセルは明るい性格で、夫を良く理解し愛している。ビルの連れ子ビリーは都会育ちで若干ひねくれているが、ゴールデン・ポンドでの暮らしを経て態度が軟化する。

〈会話1〉

ビルとチェルシーが旅行に行っている間、ビリーはノーマンとエセルに預けられることになった。釣りに行こうと誘うノーマンとエセルに対し、両親に取り残されたビリーはふてくされて、自分はこの家を出ていくと二人に告げる。以下はビリーとノーマンの会話。Bはビリーの発話 Nはノーマンの発話である。エセルも同室にいるが、化粧台の鏡越しに

二人の様子を窺っているだけである。

B : (ため息の後、言いよどむ) Listen. I mean, I know I'm just being dumped here.

(視線を外しうつむき加減で) Just like my middle name. You turkeys don't want me.

N : (ビリーを見つめながら) Bullshit. I'm 67 years old older than you, how do you know what I want? We're going fishing now. (ビリーは一度目をそらし戻す)

We want you to go along if you want to come with us... I suggest you get your ass down to the dock in two minutes. (持っていた釣り用のベストをビリーの近くに投げる)

Okay, Miss Turkey, let's go. (エセルを連れて部屋を出る)

都会で育ったビリーが、田舎の慣れない土地に置いて行かれた不安などから自分は邪魔者だと言う。しかし、その言葉をノーマンは自分の気持ちが 67 歳も年下のビリーが理解できるはずがないと一蹴し、一緒に釣りに行くよう誘う。ちなみにノーマンの発話中の Bullshit は、ビリーがよく口にする罵り言葉である。

〈会話 2〉

上記の場面の続き。屋外の棧橋へと場面が移る。棧橋でボート(ここで言うボートとは、原動機付きのモーターボートのことである)の準備をしているノーマンと、すでに乗り込み待っているエセルのもとへ、ビリーがノーマンの渡したベストを着てやってくる。E はエセルの発話。

E : (しゃがんで作業しているノーマンの頭をつついて) Here he is.

B : (言いよどみ咳払い) I, I thought I might just sort of come along and see what this bullshit is all about.

N : (そっけなく) Get in.

E : You look very handsome in that fishing vest.

B : Thank you. (ノーマンとビリーがボートに乗り込む) I mean... Thank you.

(ボートの座席を叩きながら) So, how fast dose this old tub go, anyway?

(ノーマンがボート急発進させる) All right! (笑)

ここでは〈会話1〉でなされた会話を受けてビリーがここでの生活を見極めたいと言い出す。室内での会話の気まずさから、言いよどみ冗談めかして話すビリーに対し、ノーマンはその態度や言葉に関して何も言わずに、ボートに乗るようにだけ言う。その後ビリーにボートの古さをからかわれたノーマンは、ボートを急発進させ速さを見せつける。〈会話2〉ではエセルも発言するが、会話の中心に入ってくることはせずに状況に応じて適宜反応する程度である。

上記二つの会話から分かってくるのは、ノーマンは常にビリーに対し気を使っているということだ。〈会話1〉では、自らを卑下する発言をしたビリーに対して、ノーマンは「そんなことない」などとは言わなかった。そのかわり、相手の未熟さを指摘したうえで、自分たちと行動する中でビリーのことをどう思っているか見極めてほしいとの思いをうかがわせる発言をしている。この発言は、2章で挙げた男性同士が相手の立場を下げないために、悩みごとなどをたいしたことではないと片づけてしまう会話のスタイルと良く似ている。実際、ノーマンが **Bullshit** と発言した際、そばで聞いていたエセルは驚いた表情を浮かべるが、ビリーは少し苦い顔をしただけである。この会話と反応から、年齢に違いがあっても男性の会話のスタイルはほぼ共通しているといっても過言ではないと考えられる。男性のラポール形成というのはある程度、個人差はあれど一般的に男性であれば通用するものがあって、それは年齢や年代に左右されないものなのかもしれない。また、〈会話2〉ではボートの古さをからかわれたノーマンが、ボートを急発進させスピードを見せつけるという行動を見せている。これは一見すると対立的姿勢を示しているが、一方で二人の年齢が離れていたとしても両者の立場は対等であるとうかがうことが出来る。

アメリカの文化人類学者として知られる Schneider (1980) は、アメリカの親族関係は単に機能上の相関的な家族の役割の繋がりとして対処するのではなく、シンボルと意味上のシステムとして系統的に対処すると述べている。つまり、親族関係は血の繋がりが重要なのではなく、置かれた状況や立場によって形作られていくものだという事だ。上記の映画の中で、ノーマンとビリーは全く血の繋がりが無いものの、娘の結婚というきっかけを経て祖父と孫という関係になっている。これにより、ノーマンは祖父の役割を、エセルは祖母の役割を、ビリーは孫の役割を持つことになる。これも一種の親密性を形成する一つの要因となりうる。

映画全編を通してノーマンとビリーは特に親密になっていく。ノーマンとビリーは物事

の捉え方や考え方に共感する部分が多いからだろう。二人は、エセルやチェルシーとは交わさないような共通の冗談で仲を深めていくのだが、ときに冗談やからかいは相手との関係を上手くとり持たないときがある。ノーマンとビリーの父親であるビルとはどこことなくぎこちない雰囲気であった。

〈会話3〉

ノーマン夫妻の別荘に滞在するチェルシー、ビル、ビリー。エセルとチェルシーとビリーは外に出ていき、家の中にはノーマンとビルの二人だけである。ビルは当たり障りのない話題を振るが、いまいち会話の盛り上がらない二人。そんな中、ビルはノーマンに今夜チェルシーと同じベッドで寝てもいいかと話を切り出す。Nはノーマンの発言、Blはビルの発言である。

ビルがノーマンの隣に座り、話を切り出す。この時両者はお互いの顔を見ている。

N : That leaves only Chelsea and you.

Bl : Yes.

N : (目線を一旦外して、戻す) Why would I find that offensive? You're not planning on doing something unusual, are you?

Bl : Oh! No, just... (戸惑い口ごもる)

〈会話3〉のやりとりは、冗談によりラポールが形成されなかった例である。この会話ではノーマンがあえて性的な話題をほのめかしている。しかも、冗談とも本気とも取れない言い方で、この後の会話もまくしたてるように話す。そのため、ビルは驚き戸惑いながら言いよどんだ後に、気分を害してしまった。しかし、ノーマンはチェルシーのことを独立した一人の女性として認めており、後にノーマンはエセルにビルをからかったのだと話しているため、二人が同じベッドで寝ることに関して批判的な立場ではない。では、なぜノーマンはきわどい言い方をしたのか。それは、ビルに対して自らの立場の方が上だと知らしめるためではないか。特にノーマンは元学者であり、議論や弁論については得意分野である。ビルが機嫌を損ねたのもあまりの言い方に腹を立てただけではなく、自らの立場を軽んじられたからという側面もあると言える。

実は、異性が絡む性的冗談は同性同士の間で非常に受けが悪いという結果が出ている。

葉山・櫻井が行った調査（2008）によると、性的タブーに関する冗談が人間関係を円滑にするような機能を果たすときは、両者がお互いのことを十分に理解している時でなければならぬという結果が出ている。こういった冗談に対する傾向を破ったことも、二人の間にラポール形成がなされなかった原因の一つでもある。

〈会話4〉

しかしビルもノーマンに言われるがままにはなっていなかった。以下の会話は〈会話3〉の続きで、気分を害したビルがノーマンに言い返す場面である。

Bl : (立ち上がり腕を組みながら) It's not imperative that you and I become friends. I thought it would be nice. I'm sure you're a very fascinating person and I thought it would be fascinating getting to know you. ~中略~ I just want you to bear in mind while you're jerking me around ~中略~ (ノーマンの近くに座る) I know precisely what you're up to that I can talk only so much of it. Okay? ~中略~

N : (ビルを指さしながら) Very good. That's a good speech. ~中略~ You seem like a nice man. A bit verbose, but nice.

Bl : Thank you.

N : You're right about me. I'm fascinating.

Bl : I'm sure you are.

ビルの1回目の会話は、中略を含めノーマンの話し方について非難しつつお互い仲良くなれたらいいと素直に話している発言である。その上ノーマンの人柄を良い人物だと認め、自分が妥協する姿勢を見せている。その言葉に答えて、ノーマンも相手を好人物だと認める発言をしている。ビルはノーマンを立てつつ、しかし言いたいことはしっかりとやったことがノーマンに良い印象を持たせることになった。この会話は、男性が喧嘩腰な口調で親密性を築く方法と似ている。ビルは自らの地位が下がったままでは我慢できず、地位を取り戻そうとしている。ノーマンが仕掛けた喧嘩腰の会話に、ビルが上手く返答したことで両者は対等な関係になることが出来たというわけだ。場合によっては、男性は女性のように相手の立場を慮って話をうやむやにするよりも、会話の中で隠し立てすることなく正直な意見を述べるの方がラポール形成に重要となってくると言える。

おわりに

相手を知る際に重要な要素は会話であると「はじめに」でも述べた。それは一般的に言われていることでもあるし、2章で述べた4つの親密性を示す要素のうち、他者とのラポール形成で一番重要になってくるのはやはり会話であると考え。握手や服装は相手の内面を知るには充分ではないし、儀礼的側面は一時の盛り上がりであることは否めない。会話を重ねるうちで他者理解を深めていくのだ。

今回の検証で気付いたのは、一般的に男性は直接的な話し方だと言われているが、意外と言外に意味を含ませる話し方をしているのではないかということだ。特に自らの気持ちや本音に関することに対しては、ひたすらに言外に含ませる。また、立場にこだわる行動が良く見られる。それは相手より上でありたいというものであったり、平等でありたいというものであったりする。ラポール形成においてそれら二つは重要な要素としてはたらくものようだ。もちろん会話している男性たち自身は無意識的にそういったことを行っているはずである。会話にもその他の親密性を形成する行動にも共通することは、男性は基本的に相手に弱みを見せないということだといえる。弱みを見せるということは付け入る隙を与えることであり、良いことではないのだ。

「はじめに」でこの論文の仮説として、男性は男性特有の親密性を表す会話のスタイルがあるのではないだろうかと言ったが、男性のラポール形成に必要なのは、言外に含まれた会話の意図を読み取る能力と、相手の立場を尊重する姿勢、そしてそういった感じ方に対する理解であると感じる。男性同士ならば自然と出来ることなのかもしれないが、女性であってもこれらのことを理解すれば、すれ違わずに円滑な人間関係が築ける可能性があるのだ。4章で会話分析に用いた映画の中で登場するノーマンの妻エセルは、夫と娘とでは上手く会話のスタイルを変えている。そのため、男女関係なく良好な人間関係を築けている。

徳井・榎本はコミュニケーションとは他者と意味を共有し、双方向に影響を及ぼし合っていくものである(2006:1)と述べている。会話のスタイルを理解することは、双方が相手と良い影響を及ぼし合うことが出来るための、手段となりうるだろう。

引用・参考文献

Deborah Tannen 『Talking from 9 to 5 : women and men at work』 Quill 2001

- Deborah Tannen 『You just don't understand : women and men in conversation』
Ballantine Books 1991
- デボラ・タネン 田丸美寿々・金子一雄訳『どうして男は、そんな言い方 なんて女は
あんな話し方』講談社 2001
- デボラ・タネン 田丸美寿々訳『わかりあえる理由わかりあえない理由』 講談社 2003
- 伊藤公雄『〈男らしさ〉のゆくえ』新曜社 1993
- 多賀太『男性のジェンダー形成』東洋館出版社 2001
- 村田泰美『異文化コミュニケーションとしての異性間コミュニケーション』名城大学人間
学部人間学研究第5号 2007年12月25日
- 中村桃子『ことばとジェンダー』勁草書房 2001
- れいのるず秋葉かつえ『ジェンダーの言語学』明石書店 2004
- 中山晶子『親しさのコミュニケーション』くろしお出版 2003
- 齋藤孝『コミュニケーション力』岩波新書 2004
- John Gray 『Men are from Mars, Women are from Venus』 HarperCollins 1992
- V.W.ターナー『儀礼の過程』思索社 1996
- アノルト・ファン・ヘネップ著 綾部恒雄、綾部裕子訳『通過儀礼』誠信書房 1974
- 菅原和考・野村雅一編『コミュニケーションとしての身体』大修館書店 1996
- A.ケンドン・A.ファーバー著佐藤和久訳『人間の挨拶行動』上記収録
- 小馬徹『握手行動の身体論と政治学』上記収録
- アン・ホランダ著 中野香織訳『性とスーツ』白水社 1997
- リリアン.B.ルービン『夫/妻この親密なる他人』垣内出版 1992
- Michael Powell 『101 Things You Should Know How to Do』 Sterling Publishing 2008
- 東玲奈『イギリスが生みだしたスーツ～社会におけるスーツの役割～』日本女子大学文化
学学会文化学研究 2003年
- 川名好裕『対人関係における身体接触の位置づけ』明治大学心理社会学研究第3号 2008
- ハロルド・ガーフィンケル『エスノメソドロジー』せりか書房 1993
- 内藤陽子『日本の職場における言語活動の心理的作用と人間関係に及ぼす影響』卒業研究
論文・要旨集第1号 藤女子大学文学部文化総合学科 2004年3月14日
- 前田泰樹 他編『エスノメソドロジー人々の実践から学ぶ』新曜社 2007
- 好井裕明 他編『会話分析への招待』世界思想社 1999

- 山田富秋『会話分析を始めよう』上記収録
- 井上俊 他編『他者・関係・コミュニケーション』岩波書店 1995
- 水島梨紗『日本語日常会話における「からかい表現」のフレーム分析』ヒューマン・コミュニケーション研究 34 巻 2006
- 葉山大地・櫻井茂男『過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討』教育心理学研究第 56 巻 第 4 号 2008 年 12 月 30 日
- David M. Schneider 『American Kinship』The University of Chicago Press 1980
- 徳井厚子・榎本智子『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』ひつじ書房 2006
- 『ジーニアス英和辞典第 4 版』大修館書店 2006
- 『ブリタニカ国際大百科事典』ティービーエスブリタニカ 1972 - 1975
- 『倫理用語集改定版』山川出版社 2009
- 映画レビューサイト Flyer's Nostalgia
- <http://www.fnosta.com/16ta/title/ongoldenpond.html>
- 映画 On Golden Pond 監督マーク・ライデル 1981 年アメリカ 109 分